

新里明士 曲／面

2023年11月25日（土） - 12月26日（火）

12:00 - 19:00 日・月・祝 定休

Yutaka Kikutake Gallery では11月25日（土） - 12月26日（火）まで、新里明士によるギャラリーでの第三回目となる個展を開催します。洗練された技術と素材のコントロールが特徴的な新里の作品は、アメリカ、イタリア、ルーマニアなど海外の多くの展覧会にも出展され、高い評価を得ています。「曲／面」と題された本展では、新里の代表的シリーズ「光器」の延長線上に展開された新作群の配置によって、光、色、および形態が相互に呼応し合う包括的な空間表現に取り組みます。

本展を構成する作品群は、「器」という概念から解き放たれた自由なフォルムが印象的です。天井からはサークル型の平面作品が数点、吊り下がっているのが見えます。白い素地に穿たれた穴が光を取り込み、空間に浮遊感を与えているようです。展示空間の真ん中には台が置かれ、本展のメインとなる数点の白磁と、様々な色合いのボール状のオブジェが、差し色のような効果をもたらしながら、コンポジションを形成しています。本展制作において、器にとって不可欠な「高台」から自由になることを意識した、と新里は言います。容器の底に設ける支えである高台は、鑑賞作法においても、あるいは器を卓上に置く際の実用的な観点においても重要なパーツです。本展制作において作家は、それらをひっくり返し、さかさまにした状態で焼成するという手法を取りました。高台がなく、重力に従って垂れ下がり焼成されたフォルムには、ものをいれる容器という先入観からいかに遠く離れることが出来るか、という作家の思考形態が示されているようです。本展を構成する作品に、器という言葉は使われず、英語の「Luminescence」が使用されていることにも、彼の問題意識が現れているといえるでしょう。

「磁器」と「光」、あるいは「象徴的な器」と「実用的な器」の関係性を追求してきた新里は、工芸とより自由な形態の探索との間を行き来しつつ、その実践に深みを与えてきました。繊細な素材の焼成過程につきもののやぶれや、傷をあえて取り入れる試みもまたそのひとつです。手作業であけられた小さな穴の並びの細やかな印象とともに、欠けややぶれが生み出すダイナミックな動きは、彼の作品に独特の魅力を付与しています。

「光器」シリーズが明かした洗練と不完全さのバランスは、本展において、細部にフォーカスを集める工芸的な視点から飛翔し、鑑賞者により広がりを感じさせる空間構成へと発展を遂げています。新里の生み出す斬新なコンポジションは、伝統的な陶磁の世界を原点としつつ、より自由で型にはまらない表現の可能性を追求する、二つの視座の対極性によってもたらされています。素材と技法の探求を深め、実践を重ね続ける新里明士の新境地をぜひご高覧ください。

アーティストについて

新里明士は1977年千葉県生まれ。現在は岐阜県土岐市を拠点に活動。透過性の高い白磁に穴を開け、透明の釉薬を埋めて焼成した代表作「光器」をはじめとする独創性の高い陶磁を手掛ける。近年では本作の焼成の過程で生まれる、傷やひび割れを起点とする新たな造形の可能性を探求し、破綻の中に生じる美しさに焦点を当てた作品を発表。光を帯びたような繊細な姿が特徴的な新里の作品は、アメリカ、イタリア、ルーマニアなど海外の多くの展覧会にも出展され、高い評価を得ている。近年の主な個展に「translucent transformation」(Yutaka Kikutake Gallery、東京、2022年)、「均衡と欠片」(Yutaka Kikutake Gallery、2021年)ほか、主なグループ展に「未来へつなぐ陶芸－伝統工芸のチカラ展」(パナソニック汐留美術館、東京、2022年)、「近代工芸と茶の湯のうつわ－四季のしつらい－」(国立工芸館、石川、2021年)、「No Man's Land－陶芸の未来、未だ見ぬ地平の先－」(兵庫陶芸美術館、2021年)、「DOMANI・明日展 2021」(国立新美術館、東京、2021年)など。主な受賞歴に、2005年イタリアファエンツァ国際陶芸展新人賞、2008年パラミタ陶芸大賞展大賞、国際陶磁器展美濃審査員特別賞、2009年菊池ビエンナーレ奨励賞、2014年MOA岡田茂吉賞新人賞、2021年2020年度日本陶磁協会賞。

主な所蔵先に、Minneapolis Institute of Art (アメリカ)、茨城県陶芸美術館、Palamita Museum (三重)、MOA美術館 (静岡)、Faenza Ceramic Museum (イタリア) Anadolu University Museum (エスキシェヒル、トルコ)。